ESSAY

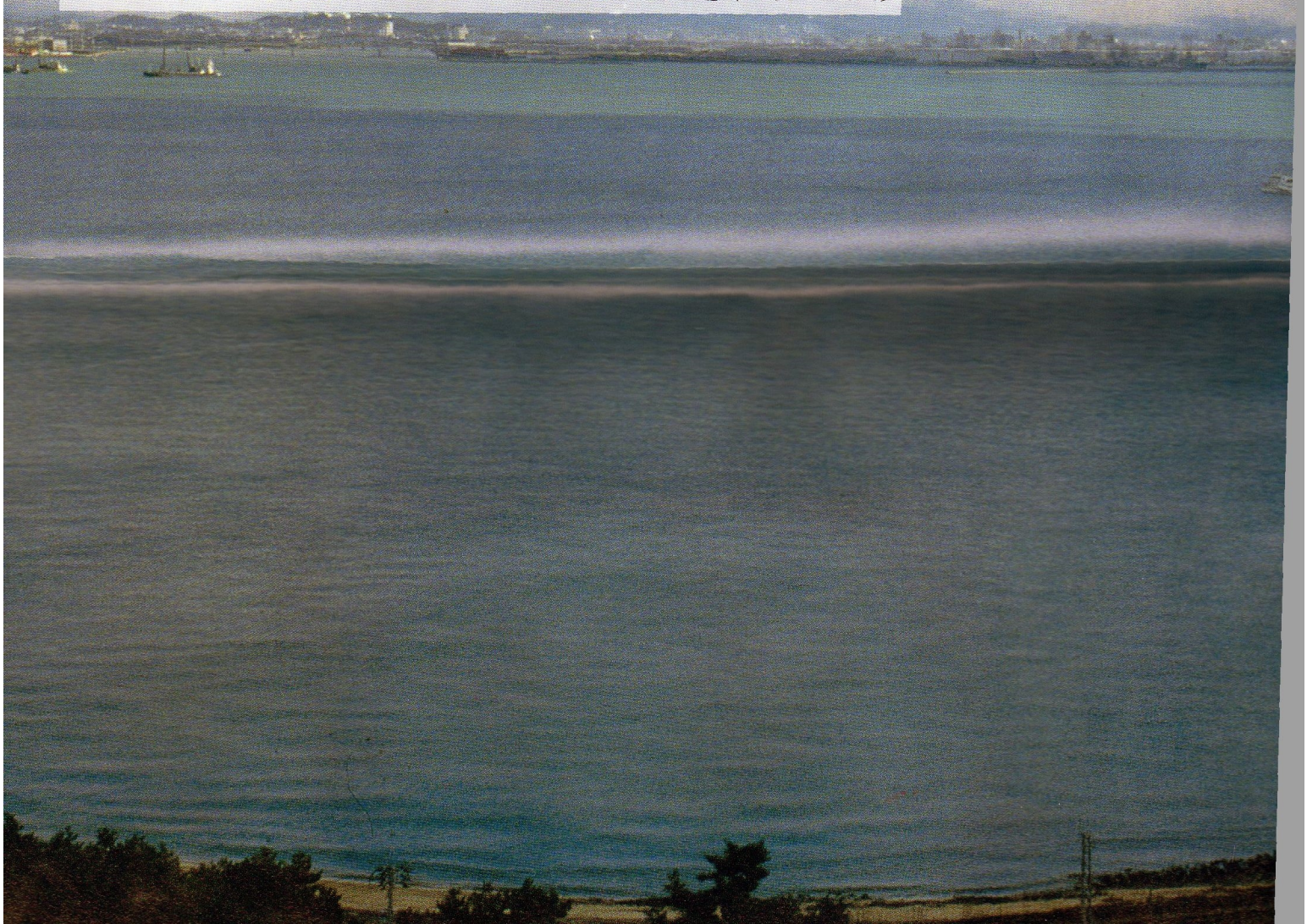
海の中道幻想

池田知隆（ジャーナリスト）
Tomotaka Ikeda

博多、それはいつしか「走る」イメージと重なってくる。祇園山笠とその青春を描いたNHKのあの朝の連続ドラマ「走らんか！」からではない。厳冬を思わせる氷雨の中、海の中道を走ったマラソン選手たちの熱い息遣いが幻の光の向こうから甦ってくるのだ。

海の中道。右手に玄界灘、左手に博多湾をのぞみ、海上を西北に向かって直進している砂州地帯だ。その突端には金印の発見で知られる志賀島があり、古代へと連なる道でもある。12月の第一日曜日、平和台を起点に繰り広げられる福岡国際マラソンで、かつて海の中道に雁ノ巣折り返し点があった。だが、85年から風の影響を受けやすいとの理由でそのコースははずされた。

いくつかの上り、下りを繰り返し、左右に大きなカーブを切りながら、松林地帯をつきぬける海の中道。二つの海からの荒い風に虐げられ、松は低く、横に枝をのばしている。18キロから20キロにかけて、いわばスピードの極限を追求する折り返し地点に向けて、選手たちは自分にあったリズムを作ることにいそしむ。スパートのかけあい。リズムの乱気流に巻き込まれた時点で敗れる。

万葉の昔、さまざまな夢を抱いた人たちが海を渡って来た道。その地霊に導かれて、黙々と時空を遡っていくかのような選手たち。「もし海の中道が海をわたって無限に沖にのびていく砂州であれば、マラソンにとって、これほど理想のコースはない」と作家、虫明亜呂無（むしあげあろむ）は書いた。「その時、すぎてゆく時間の流れは、そのまま、ランナー自身の支配に収められ、ランナーの存在そのものが時間の源泉となるであろう」と。しかし、そこには勝負という現実への折り返し地点があった。

光と風と水蒸気の微妙な組み合わせで、千変万化となる海辺の光景。そこに軽快な鼓動に乗った人間のリズムが加わる。音楽がある。空の果てに消えてゆきそうなロマンを誘いながら、人間の姿を浮き彫りにさせた海の中道のコースはいまや幻想のかなたに消えた。近くの遊園地からは、疾走する最新のジェット・コースターに沸きあがる歓声が響きわたっている。